

## 長唄唄方阪東亀寿旧蔵史料について

前島 美保

筆者は平成二十八年（二〇一六）秋、長唄唄方の阪東亀寿が所持していたとされる史料一括を古書店より手に入れた。この史料六十一点からは、阪東亀寿が歌舞伎の番付等に記載されずほとんど他史料からは浮かび上がってこない人物にもかかわらず、黒御簾の豊富な芝居唄のレパートリーを有し、時には明治後期大阪長唄の名手阪東小三郎のワキを勤め、上方舞の地方としても活躍していたこと等が知られる。

本稿は、この阪東亀寿旧蔵史料全体の概要と各史料の詳細を『近代歌舞伎年表』等と照らし合わせながら紹介し、史料から窺われる阪東亀寿なる人物の事績と、そこからわずかに垣間見える近代上方劇界・音曲界を素描することを目的とする。また近代上方の囃子方旧蔵コレクションの中で、本史料がどのような位置づけにあるかについても併せて検討してみたい。

〔キーワード〕近代上方歌舞伎 囃子方 黒御簾音楽 芝居唄 地歌 上方端歌 上方舞 音楽演出

### はじめに

近代上方歌舞伎に阪東亀寿という長唄の唄方がいたらしい。「らしい」と書いたのは、これまでその活動時期や来歴がほとんど知られていない囃子方だからである。大正十年（一九二一）五月二日初日、松島八千代座の長唄唄

くる。本稿は、阪東亀寿旧蔵史料全体の概要と史料の詳細を『近代歌舞伎年表』等と照らし合わせながら紹介し、史料から窺われる阪東亀寿なる人物の事績と、そこからわずかに垣間見える近代上方劇界・音曲界を素描することを目的とする。

なお、近代上方の囃子方旧蔵コレクションには、ほかにも初代中井猪三郎、小川弥三郎、杵屋富造、中村美秋、杵屋胡金吾等のものが知られる。非公開を前提とする史料の性格上、近代上方歌舞伎音楽の伝承や演出についてはなお不明な点が多い中にあって、本史料がこうしたコレクションの中などでどのような位置づけにあるかについても併せて検討したい。

### 一、史料の概要

平成二十八年（二〇一六）秋、縁あってこの阪東亀寿が所持していたとされる史料一括を古書店より手に入れた。目録に「長唄唄方阪東亀寿旧蔵唄本類一括」とあつたそれである（図版1）。この史料群からは、阪東亀寿が番付等に記載されない囃子方であつたにもかかわらず、時には「明治後期の大坂に於ける長唄謡ひの名手」と称された阪東小三郎（一八四六～一九〇七）のワキを勤めるなどの実力の持ち主であつたことなどがわかつて

本史料は全六十一点から成る（後掲【表1】）。すべて唄本である。独特の



### 【図版1】「丘山堂古書目録」より（一部転載）

筆跡から、いくつかの例外を除き、基本的にすべて本人による自筆本と考えられる。<sup>(3)</sup>署名には「阪」と「坂」の二種の表記が見られるが（【図版2】）、これらを年代や機会によって使い分けていた様子は今のところ見受けられない（本稿では暫定的に「阪東」で統一する）。

全六十一点は形態上、大きく二つに分けられる。一つは半紙本を仮綴じした薄物の唄本五十五点、もう一つは小型の枕本六点である。唄本、枕本の順に特徴を考察してゆきたい。

## (一) 薄物唄本(五十五点)の詳細

薄物の唄本五十五点は、興行で用いられたと考へられるものと、それと特  
定されないものとがある。その線引きは必ずしもはつきりしないが、前者、



【図版2】署名（上段左より「大津画所作事」「忠臣蔵七段返し所作事」「供やつこ」「娘道成寺」）

すなわち興行時に所作事（舞踊）で用いられたものと思しき唄本の表紙には、年月日、座、外題、「寿」、署名、裏表紙に「千秋万歳大々叶」等と書かれてあるものが多い（図版3）。計二十九点ある（表1—仮番号1～29）。このうち十九点に紙縫り紐の輪がついている（図版3）。あるいは束ねてまとめて保管していたか、何かに提げていたのだろうか。いずれにせよ、この紐の輪が興行時の唄本を特徴づけている標となっている。これらの唄本は縦半分に折りたたんだ痕跡も見受けられ、概して使用感がある。この二十九点を上演年代順に並べてみると、明治三十六年（一九〇三）三月角座の「妹背山道行」（お三輪）より大正九年（一九二〇）十二月松島八千代座「夕ぎり所作」まで十七年に及ぶ。比較的短い期間ではあるが、この頃の上方劇界は初代市川右團次、初代中村鴈治郎らが大芝居の中心をはる一方、新劇や活動写真等の台頭が著しい時代であり、社会に目を向けると大阪天王寺にて第五回内国勧業博覧会が開催された時期から日清・日露戦争を経て、いわゆる大大阪時代までという、上方における近代化の時期と重なる。

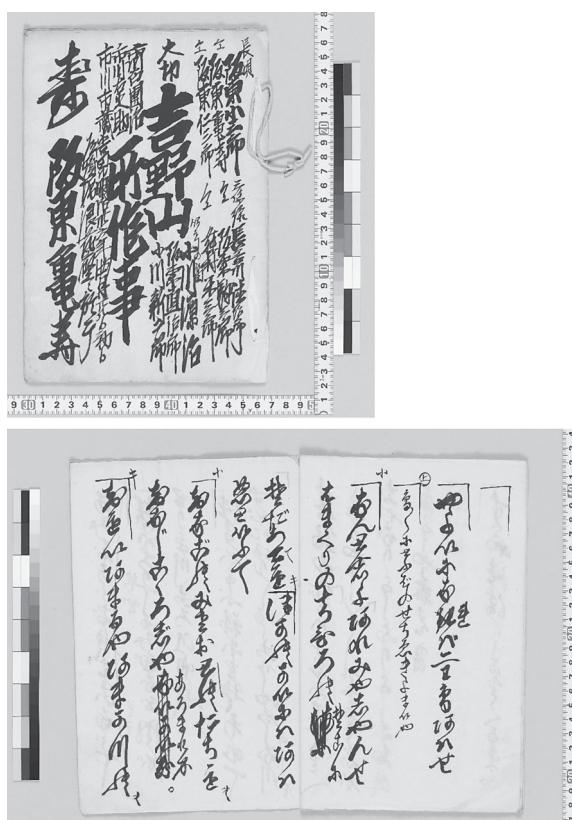
いくつか唄本を取り上げながら特徴を見ておきたい。【表1—2】の「吉野山所作事」（同計略花吉野山）は、明治三十六年四月二十九日から五月二十八日まで浪花座で大切で上演されたもので（図版4）、初代市川右團次が楠正行、市川右之助（二代目市川右團次）が塚本狐、市川市蔵が弁の内侍と



【図版3】「高時天狗舞所作事」唄本表紙、裏表紙

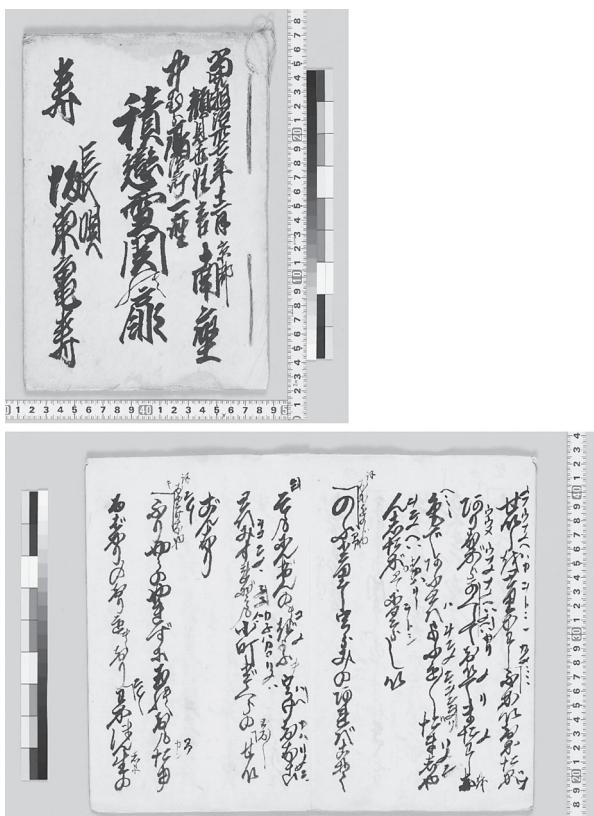
千枝狐を演じた。この時の長唄連名は番付等では確認できず、当該唄本で初めて明らかになるのだが、タテ唄阪東小三郎のワキで阪東亀寿が出ていたことが知られる。本文の注記を見ると、「小」「キ」と唄い分けが記されており、「小」はすなわち阪東小三郎、「キ」は阪東亀寿の唄い場とすることがわかる（図版4）。阪東亀寿の読みは「キジュ」であったのだろう。『なんとしよ』以下の内侍のクドキを小三郎と亀寿で分け合っていたようだ。ここに見られる「(上)」は淨瑠璃の意で、本曲は竹本（義太夫節）と長唄の掛合で行われたことも判明する。

唄本の「小」の書き込みが阪東小三郎の唄い場であると仮定すると、この他にも明治三十六年三月「妹背山道行」（表1—1）、明治三十八年（一九〇五）十一月「門けいせい所作事」（表1—11）に認められる。小三郎は明治四十年（一九〇七）十二月七日に行年六十二で亡くなっているから、その晩年の舞台活動を奇しくも亀寿の唄本から覗き見ることが可能である。



【図版4】「吉野山所作事」唄本表紙、本文

奏習慣は、近世後期以来の上方特有の現象として、これまで以下のように説明してきた（傍線部筆者）。



【図版5】「積恋雪関の扉」唄本表紙、本文

【表1—3】の「積恋雪関の扉」は、明治三十七年（一九〇四）十二月二日より南座にて初代中村鴈治郎の墨染、二代目中村玉七の閔兵衛、中村成太郎（後の魁車）の小町姫によつて演じられたもので、番付に「竹本連中 長唄はやし連中」とあつて、常磐津節ではなく竹本と長唄の掛合で出された。当該唄本を見ると「(上)」の書き込みが散見される（図版5）。抜き差しはあるものの、常磐津節の「関の扉」をよくなぞつており、カン（甲）の書き込み位置も一致している。亀寿は「不慮の矢疵に」以下のカンを受け持つていることが確認される。

このように、唄本からは長唄以外の伝承曲に亀寿が出演している例が多く見られ、常磐津節では「積恋雪関の扉」のほかに「油とりうつほ猿」（表1—13）、「忠臣蔵八段目道行所作事」（表1—17）など多数あり、また清元節では「みちとせ道行 忍逢春雪解」（表1—22）も唄つてている。こうした演

京阪は前期に引続き義太夫節が「チヨボ」以外に所作事地としても盛に用ひられて、甚だ流行した宮古路諸流、殊に宮蘭は本期の初にはその景事、道行等を大成したが、本期中頃に至つて景事、道行が漸次衰退すると共に宮蘭も廃れ、遂に宮古路諸流は劇場附の囃子方の兼業となつた。更に前期末より本期中頃にかけて江戸長唄、常磐津、富本、清元、新内等が移植されたが、これ等何れも、囃子方によつて兼業された。でその名目もすべて「ぶんご」又は「江戸唄」の名称の許に総括された。その結果、「双面」と「助六」とが同一仁により「戻駕廓大全」や「鳥羽絵」が義太夫節の語り手により演じられるといふ変態的な現象さへ生ずるに至つた。このまゝ、明治に及んだ為に、近頃まで大阪の囃子方といえば、一人で各種を兼ねる悪い慣例の種子が蒔かれる因となつたのである。

亀寿の唄本はこの言を如実に伝える。しかしこうした場合であつても、亀寿自身、唄本表紙に「長唄」と署名しており、あくまで本人は長唄方だと主張しているのは興味深い（図版5）。この点は後に検討する。

興行時に用いられた唄本は、市川右團次一座や中村鴈治郎一座などの大芝居の舞台のものが多いが、中には女役者の地方を勤めた時のものもある。「鶴亀引抜紀尾井獅々」（表1—21）は、大正二年（一九一三）六月二十一日大阪九条第二芦辺俱楽部にて上演された女芝居岩井琴女一座の唄本である（図版6）。第二芦辺俱楽部は九条歌舞伎座を改称したもので、当時活動写真や女芝居（所作事）に使われていた。岩井琴女は女團十郎と称された市川九女八（一八四五前後—一九一三）の門弟で、師弟共演による女芝居を頻繁にこの芦辺俱楽部で出している。その岩井琴女の「鶴亀引抜紀尾井獅々」の

地方を阪東亀寿が勤めていたことになる。<sup>(9)</sup>

以上に対して、興行時と特定されない唄本が【表1—30～55】で、計二十六点ある。舞踊会やお渕い等が想定されるが、唄本自体に情報量が少なく、十分に上演時を考証することができない。その中で【表1—54】の明治三十一年（一八九八）十一月「うつぼ猿」の唄本が、ひとまず亀寿旧蔵史料の上限を示す史料として注目される（【図版7】）。表紙に「山村つね様」とあるが、この山村つねは初世山村舞扇斎の養女山村れんの門弟にあたる人物と推測される。<sup>(10)</sup> 興行時と特定されない唄本は、使用機会が少なかつたためか、保存状態の良いものが多い（【図版8】）。これらの唄本を概観した場合にも、長唄以外の音曲のものが比較的多く見られるという特徴は、前述の興行時の唄本と同様である。「子持山姥」「山姥」「ましら猿」「乗合万歳」「積恋雪関扉」「将門」「お光狂乱」「玉うさぎ」「清元權八」「千本道行」など竹本、常磐津節、清元節の伝承曲の唄本が、「勧進帳」「末広がり」「供やつこ」「娘道成寺」等の長唄唄本と一緒に存在しているのである。否、長唄のものは唄本全体の中で五分の一程度しかなく、圧倒的に少ない。

実は、この一見不可思議な唄本の在り方にこそ、阪東亀寿の立ち位置が知れるのではないだろうか。つまり、唄本に自ら「長唄」と署名しながら、長唄唄本の現存数が少なく、番付等の出囃子連名に記載されることがほとんどなく、それでも時に阪東小三郎のワキを勤めるなど重要な唄い場を任せられ、竹本、常磐津節、清元節の伝承曲も担当せざるを得なかつた事情である。すなわち、亀寿は黒御簾の唄方が専業



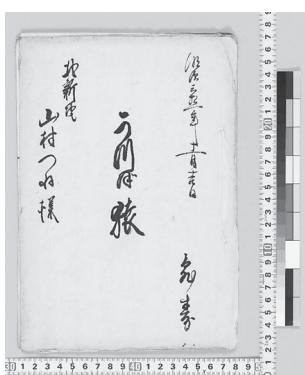
【図版6】「鶴亀引抜紀尾井獅々」表紙

だったのではないかということである。

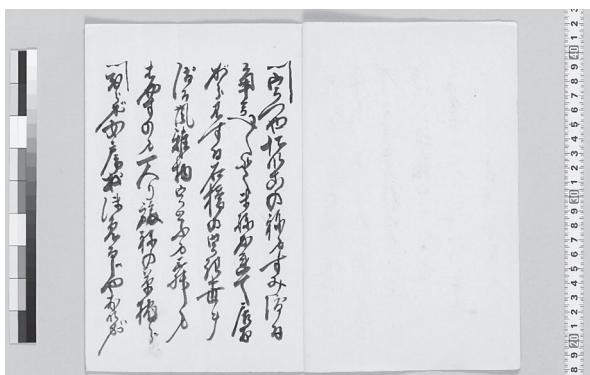
ここまで考えが及んだ時、亀寿旧蔵史料のもう一つの史料群、枕本の存在が大きな意味を持つてくる。統いて枕本六点について検討する。

## (二) 枕本(六点)の詳細

分厚い横本の形状の枕本は六冊ある（【図版9】、【表1—56～61】）。いずれも目次が付されており、その後に各曲の歌詞が列挙されている。六冊のうち、内容から主に芝居で用いられたと考えられるもの（『雑用集哥日カ恵劇場用』『所作日賀恵』『地哥端哥日カ恵』）と、主に舞地として用いられたと考えられるもの（『吾妻しらべ』『糸のしらべ』『舞地調』）とに大別される。



【図版7】「うつぼ猿」表紙



【図版8】「越後じゝ」

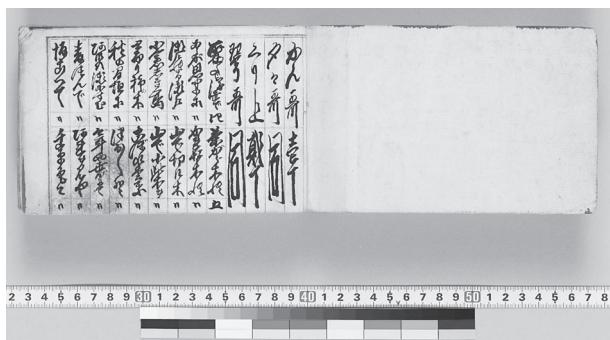


【図版 9】枕本（六点）

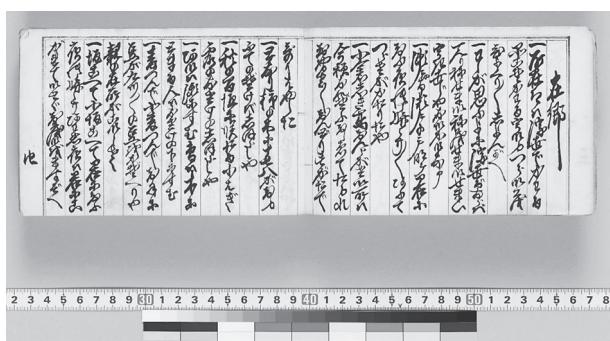
『雑用集哥日力恵 劇場用』

『雑用集哥日力恵』（雑用集歌控）は、主に黒御簾の使い物の唄の歌詞が収載された枕本である。【後掲表2】には各曲の唄い出しをリスト化したが、全二〇〇丁、のべ七二七曲を数え、収載曲が極めて多いことがまず特徴として挙げられる。目次に続き、詞章が列挙されるが、調子や口三味線、三味線の手付の記載はほとんど見られない（【図版10、図版11】）。歌詞集の様相である。

分類法が興味深い。「かん哥」（甲唄）・「タ々哥」（只唄）二十三曲に始まり、「くり上」六曲、「琴哥」九曲、「在郷」・「早ざい」（早在郷）五十一曲、「茶屋場哥」十曲、「ちらし」七曲、「神楽大拍子」十七曲と続く。以上は使用場面ごとに分類がされており、「かん哥」から「琴哥」までは主に時代物の御殿などで用いられる唄、「在郷」以下は主に世話物で使用される唄



【図版 10】『雑用集哥日力恵』目次



【図版 11】『雑用集哥日力恵』本文（在郷）

治郎はこの植木屋弥七（実ハ千崎弥五郎）を度々演じている。『雑用集哥日

である。花街ものは「茶屋場哥」、寺や神社に使われるものは「神楽大拍子」とやや独特的な分類用語もあり、ここに杵屋栄左衛門『歌舞伎音楽集成』上方編（以下『上方編』）<sup>(11)</sup>とも異なる、明治大正期頃の上方の芝居唄の体系化を見ることができる。以上に統いて、『雑用集哥日力恵』は唄い出しのいろは順に四三五曲を並べる（【図版12】）。その後、「一上り新内」「追分」「そり」「シギン」「ウタイ」等の曲が整理され、最後に決まり物と地歌や上方端歌、長唄、端唄、俗曲等の一六八曲が並ぶ。適宜替歌の例も記されるなど、非常に実用性の高い手控えとなっている。

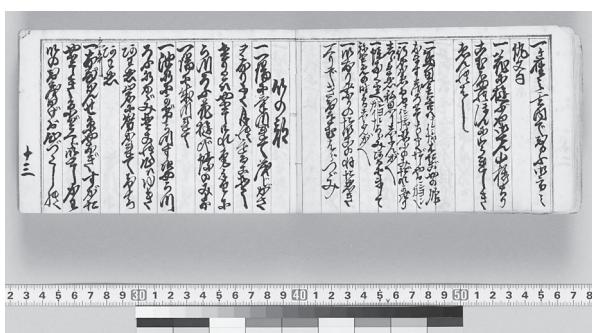
力恵』には『植木屋』の独吟として三曲が見える（図版13）。

ちぎり

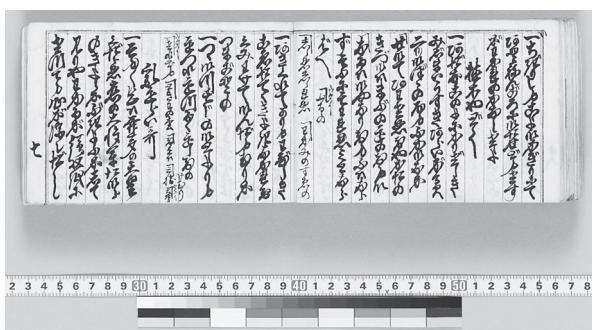
一 あだなこのよにかりざしき みじまいうすきあらいがみ 二つい  
づ、のなもふかいなか  
へせいてあわさぬおやかたの きづいはまぶのものおもい へな  
るはいやなりおもふはならず そふにそわれぬみとならば へ ウ  
タイへ山寺の

へしらぬしられぬ へわがみのすゑの

一 あきくれてかりもわびしきこゑたて、 きよきなかれおくみわけ  
て いんだもむりかつまごとの  
一 つ、いつすじのいとよりも もつれもつる、 もしおのけむり  
ウタイへされども へときわの松 へおもは へ三勝 ウタイへ



【図版12】『雑用集哥日力恵』本文（いの部）



【図版13】『雑用集哥日力恵』本文（植木やどく）

これと『日本戯曲全集』第十五巻の台本（上演年不詳）を照合してみると、『雑用集哥日力恵』の独吟の歌詞は断片的で異同もあるが、内容はほぼ同じとわかる。<sup>(12)</sup>また、謡や「常磐の松」（隣座敷から聴こえてくる余所事）の段取りもこの台本通りである。『雑用集哥日力恵』には黒御簾の唄方に必要な情報が集約されていることがわかる。ただし、基本的に芝居におけるキッカケ等については記されていない。

また、「箕輪心中」（岡本綺堂作）で用いられたとする「君と寝やろか」という曲は、『歌舞伎音楽集成』江戸編（以下『江戸編』）によれば<sup>(13)</sup>、明治四十四年（一九一二）九月東京明治座で初演された時、田圃の太夫の四代目沢村源之助がこの曲を覚えており、昭和四十年（一九六五）六月に東京歌舞伎座で三代目市川寿海が再演するにあたり、大阪の杵屋富造（一九〇二～七七）から「昔から大阪にあつた曲だ」として教えてもらい復活したということが知られる。<sup>(14)</sup>この「君と寝やろか」と同一曲が、『雑用集哥日力恵』「きの部」に「君とねよふか」として書き留められていることは、確かに杵屋富造の言を裏付ける。

『雑用集哥日力恵』にはのべ七二七曲が挙がるが、【表2】の「\*」は『上方編』『江戸編』と一致する唄で一三九曲を数える。これは全体の約二割にあたり、現在と共通のレパートリーを確認することができる。一方、それ以外の約八割は『上方編』『江戸編』には見当たらない。ちなみに【表2】には『芝居唄』と一致した曲も「○」で示したが、一九三曲で全体の三割程度にとどまる。つまり『雑用集哥日力恵』には、現在使用されることの少ない（あるいは伝承されていない、忘却された、初めて知られる）唄が数多く収載されているのであり、その内容も上方の土地や風土、習俗に由来するなど、豊穣な唄の蓄積がかつての上方の黒御簾にあつたことが具にわかるものとなっている。なお、唄の一部に近代を感じさせるものも見えるが、亀寿が<sup>(17)</sup>

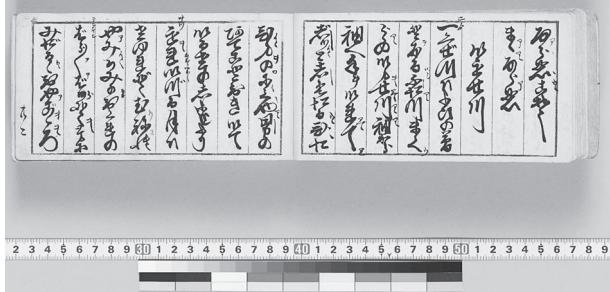
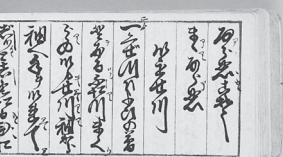
いつ頃この『雑用集哥日力恵』を分類整理し書き留めたのか、確かな年代のわかる手がかりは残されていない。

幕末から明治初期にかけて上方で活躍した三味線方初代中井猪三郎（「一八八五）旧蔵のキツカケ帳（附帳）の末尾に、同様の手控えがあることが知られている（未見<sup>(18)</sup>）。黒御簾の囃子方はこうした手控えを各人整理しているのかもしれない。今後、猪三郎の手控えとの比較検討から、明治初期まで遡り得る芝居唄を特定できる可能性もある。

### 『地哥端哥日力恵』

『地哥端哥日力恵』（地歌端歌控）は、黒御簾で使う唄のうち、独吟、地歌等曲、上方端歌、端唄、流行り唄などを収載する。唄い出しをリスト化したのが【後掲表3】で、全一五九曲ある。基本的に調子の記載はなく、所々口三味線等が施されている（図版14）。

本書はゆるやかに曲種別となっているが、先の『雑用集哥日力恵』と重複する曲もある（「瀬田のはし」「あだな世界」等）。



【図版14】『地哥端哥日力恵』本文（「いもせ川」）

本書はゆるやかに曲種別となっているが、先の『雑用集哥日力恵』と重複する曲もある（「瀬田のはし」「あだな世界」等）。先に見た『植木屋』に用いられる「常磐の松」（三勝半七）は、本書に詞章を確認できる。かつて町田博三（佳聲）は、大正期の東京の囃子と大阪の囃子の技量を比べて、後者を率直なままでに酷評したが、一方で東京にない地歌や流行歌を応用したレパートリーについては認めざるを得なかつた。<sup>(19)</sup> 実際に亀寿の『地哥端哥日力恵』の収載曲からも、上方の黒御簾の豊かな地歌や端歌等の伝承が実感される。

さて【表3】のうち、「\*」は『上方編』と一致する唄で一十三曲ある。「夕立ち」や「斎藤」は『上方編』では相方として知られる曲だが、本書に唄の歌詞が見られることは興味深い。というのも『上方編』「斎藤相方」の解説に拠れば、中村美秋（一八九〇～一九九一）の唄本には歌詞はあるものの節には覚えがないという。<sup>(20)</sup> 中村美秋は戦前戦後の上方黒御簾の唄方の重鎮で、亀寿よりおよそ一世代下るが、少なくともその頃には既にこの「斎藤」という唄の伝承はなかったと思しい。

また『地哥端哥日力恵』に記載されている「くずの葉どく」には、『芦屋道満大内鑑』子別れの場の独吟で用いられる以下の詞章が見える。

こゝろひかされて はなれがた  
なき夜の鶴 やけの、きゞすなくねより むすらの宿へかるる身の

それはつゆそふ千枝がもとへ  
今は信田のうらみ葛の葉

この獨吟の詞章の変遷について検討された配川美加氏は、詞章八種（A～H）を掲げているが、本書の歌詞はその中のH（典拠は早稲田大学演劇博物館所蔵台帳で、明治二十一年（一八八八）九月大阪角劇場と比定）とほぼ同じものとわかる。

このように収載曲と他史料とそれぞれつき合わせてみると、近代上方歌舞伎の音楽演出の一端が浮かび上がってくるに違いない。

### 『所作日賀恵』

以上二書に対しても、『所作日賀恵』（所作控）は、芝居の所作事の歌詞をまとめた枕本である。全二十三曲。上演年や劇場、役者名が付されることもあり、一（一）で検討した唄本と重なる曲が多い。【表4】「\*」の十二曲は

そのことを示している。歌詞はもちろん、所々にある口三味線、三味線のツボなどの書き込みも（一）の唄本に準じて施されており、おそらく本書は、唄本から書き写したものと含む所作事用の手控えと考えられる。また逆に、本書の補記から（二）の唄本の詳細が判明することもある。

一例を挙げると、【表1-25】にある唄本「戻り橋所作事」（戻橋）は『所作日賀恵』補記より異糸子の所作事であったことが窺われる（【図版15】）。異糸子（一八八〇～一九二〇）は、ミナミの大和屋で修業した後、神戸八千代座専属の芝居茶屋を営み女興行師として戦前戦後の劇界に通じていた異テル（一八六一～一九四六）の養女に入り、明治三十年代より道頓堀浪花座や東京市村座等にも出演した女優だつた。<sup>(22)</sup>舞踊に秀でていたらしい。唄本によればこの時の「戻橋」は、竹本と長唄が掛け合いで勤めたようだ。このほか、花井お梅（一八六三～一九一六）の「保名狂乱」も『所作日賀恵』に見られる（上演年月不明）。亀寿が異糸子、花井お梅などの地方を勤めていたことは興味深い。

また、『所作日賀恵』の「桐一葉・末広舞」は明治三十七年（一九〇四）

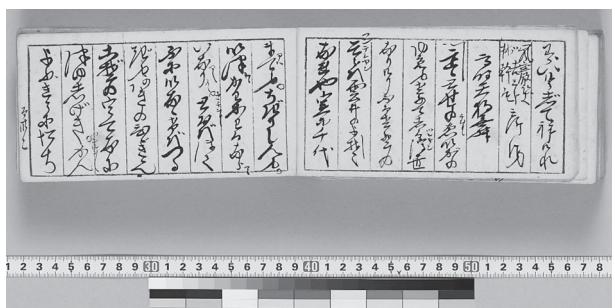


【図版15】上・中：「戻り橋所作事」唄本表紙・本文／下：「所作日賀恵」本文（「戻り橋」）

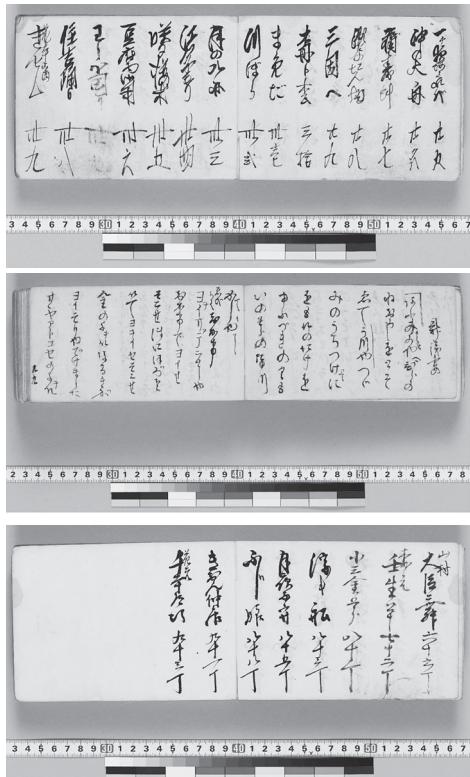
五月大阪角座で三代目片岡我当（十一代目片岡仁左衛門）の淀君・女馬士・片桐且元、実川延二郎（二代目実川延若）の石川伊豆守・秀次の亡靈・大蔵の局、嵐徳三郎の太閤秀吉実は石田三成、奴実は佐々成政によつて上演された時のものである。<sup>(23)</sup>坪内逍遙『桐一葉』の初演は二か月前の三月東京座で、五代目中村芝翫（五代目中村歌右衛門）らによつて演じられており、この時に且元役で出ていた片岡我当が大阪にて再演した長唄が『所作日賀恵』におさめられていることになる。詞章内容から、「桐一葉」は二幕目吉野山夜桜の場と畜生塚怨霊の場、「末広舞」は五幕目長廊下乳人自害の場で使われたものと判断される。さらに、『所作日賀恵』収載の「高時天狗舞」は唄本【表1-14】の「北條九代高時天狗舞所作事」と同一で、明治四十一年（一九〇八）二月京都歌舞伎座で実川延二郎が高時を演じた時のものである（【図版3、図版16】）。『京都日出新聞』（一月二十六日）によれば、九代目市川團十郎のそれとは全く別ものとの触れ込みだつた。<sup>(24)</sup>『所作日賀恵』は、新歌舞伎や活歴等、明治期東京の大芝居の上方再演の内容を確認することもできる貴重な史料ということになろう。

### 『糸のしらべ』『吾妻しらべ』『舞地調』

最後に、主に舞地として用いられたと考へられる三書をまとめてみておく（【表5-7】）。この三書が「主に舞地として用いられた」と考へた根拠は、曲名に角書きのように流派名や舞手の名前が記されているためである（【図



【図版16】『所作日賀恵』本文（「高時天狗舞」）



【図版 17】上：『糸のしらべ』目次／中：『吾妻しらべ』本文／下：『舞地調』目次

四年（一七五二）から文政十三年（一八三〇）まで増補改訂を重ねた。『吾妻しらべ』は大坂の舞地用に編集されたもので、弘化四年（一八四七）から文久元年（一八六一）まで出版された。これら版本と亀寿の『糸のしらべ』『吾妻しらべ』の収載曲は一致せず、亀寿の方は分類自体も地歌、上方端歌、歌舞伎所作事由来の曲が雑多に並んでいる印象があるが、亀寿が舞地の枕本の書名をつける際に、流布していた既刊本の存在が念頭にあった可能性も否定できないように思われる。

## 二、本史料からわかること—阪東亀寿の事績とコレクションの位置づけ—

冒頭で述べたように、亀寿の事績は番付史料からはほとんど辿ることができない。一方で、亀寿旧蔵史料六十一点からは、断片的ながら亀寿の事績および上方劇界が浮かび上がってくる。重複を恐れず、ここで改めてまとめながら、本コレクションの位置づけを確認しておきたい。

### (一) 活動期間、場所、人脈、レパートリー

阪東亀寿は近代上方歌舞伎の長唄唄方で、主に黒御簾の唄方であったと考えられる。「雜用集哥日力恵 劇場用」と『地哥端哥日力恵』と称される枕本は近代上方の芝居唄の分類と体系を把握できる内容で、その豊富な唄のレパートリーと几帳面な整理姿勢に黒御簾の唄方としての矜持が見え隠れする。本史料群に見る活動期間は、明治三十一年十一月から大正九年までの十二年間で、浪花座、角座、南座、京都歌舞伎座、夷谷座等、大阪や京都の大芝居中心に、神戸大黒座への巡業や大阪第二芦辺俱楽部等の女芝居にも参加している。京都や神戸の上演時の唄本も比較的多いことから、本拠地は大阪だが、地方での公演時に黒御簾の唄方として出向き、ついでに所作事の地方も勤めていたのではないかとも推測される。いずれにせよ、唄本や『所作日賀恵』に見られるように所作事においても、当時上方長唄唄方の第一人

ところで『糸のしらべ』『吾妻しらべ』という書名からは、近世中期以降に刊行された詞章本が想起される。『糸のしらべ』は地歌の詞章本で、寛延

者であつた阪東小三郎のワキを勤める実力を有し、初代市川右團次、初代中村鴈治郎、2代目実川延若等大立者の舞台を支えていたことが知られる。ただし、本史料群から見られる活動期間二十二年間に對する唄本の点数としては少なく、普段は黒御簾のみに出勤することの方が多いつかもしかない。加えて、岩井琴女、巽糸子、花井お梅ら女芝居の所作事にも出ていたことは当時の劇界の様子を具に伝える。

一方で、劇場外での活動、すなわち座敷や演奏会等の舞地としても演奏に携わっていた。これを裏付ける史料が枕本『糸のしらべ』『吾妻しらべ』『舞地調』で、鰐らく事山村らく、模茂都陸平ほか大阪の上方舞の各流派名や人物名が書き込まれていた。亀寿旧蔵史料から見えてくる人脈のネットワークは、上方舞にも広がりを見せている。

こうした活動範囲の広さゆえに、亀寿の唄のレパートリーは一人の演奏家のそれとしては極めて豊かなものとなつた。芝居唄のみならず、所作事、舞地用の曲まで質量とともに多岐にわたつていて。またそのジャンルも、長唄、地歌、上方端歌、竹本（義太夫節）、常磐津節、清元節、端唄、流行り唄等を含む。一唄方の旧蔵史料からは、これまで指摘されてきたものの、具体的に見えてこなかつたリアルな近代上方の囃子方の実像が浮かび上がつてくる。

## (二) 本コレクションの位置づけ

さて、本史料群は近代上方の囃子方旧蔵コレクションにおいてどのような史料的位置づけにあるだろうか。近代上方の囃子方旧蔵史料には、ほかにも初代中井猪三郎（～一八八五）<sup>(25)</sup> 旧蔵附帳（個人蔵）、小川弥三郎（一八七八～一九四四）<sup>(26)</sup> 旧蔵附帳（国立劇場蔵）、杵屋富造（一九〇二～七七）<sup>(27)</sup> 旧蔵附帳（国立劇場蔵）、中村美秋（一八九〇～一九九一）<sup>(28)</sup> 旧蔵史料（日本俳優協会蔵）、杵屋胡金吾（一九二一～二〇〇九）<sup>(29)</sup> 旧蔵史料（一部架蔵）等がある。

中井猪三郎と杵屋富造は三味線方（附師）、小川弥三郎は鳴物、中村美秋と

杵屋胡金吾は唄方である。活動時期を世代順に並べると、おおよそ明治前期の猪三郎、明治中期から大正期の弥三郎、昭和期の富造・美秋、戦後の胡金吾となる。亀寿コレクションは、時期的には弥三郎とほぼ重なる。他方、唄方の系譜を考えた場合、美秋や胡金吾のコレクションに先行する。すなわち、今後はこうした上方囃子方旧蔵史料との比較検討が、本史料の特徴および位置づけをより明確にするに違いない。また、本史料は唄方のコレクションであつたため、曲の調弦、三味線の手付、鳴物等は極めて断片的な記述しかないが、猪三郎や富造の旧蔵史料と考証することでより音楽面の理解が深まるだろう。さらに、基本的に他者が見ることを想定していない本史料には、今のところ難読箇所も多く、仮に読めても内容が不明という箇所も少なくない。<sup>(27)</sup> こうした限界を乗り越えるには、やはり他史料との照合が不可欠で、そうして初めて解決できることや、すでに述べてきたことについても修正の必要が出てくるだろう。現時点では本史料の紹介に止まっているが、より深く内容を理解してゆくためにも、近代上方囃子方のコレクション把握が喫緊の課題と言える。

むすびにかえて

以上、長唄唄方阪東亀寿旧蔵史料について一瞥してきた。第二章において本稿のまとめは終えているので繰り返さないが、本史料を十分に活用した研究の先に、近代上方歌舞伎の音楽演出も立ち現れて来るに違いない。今後も引き続き検討を重ねるとともに、本史料群の公開に向けても方策を考えていゆきたい。

（付記）本稿は二〇一七年二月に東洋音楽学会東日本支部第九十四回定期研究会で行つた発表に基づき、内容を再構成したものである。なお調査執筆に際しては、J A S P S 科研費14J02941および20K20677の助

成を受けた。

証は他日を期したい。

郡司正勝稿・浅原恒男編著

『芝居唄—歌舞伎黒御簾音楽歌詞集成—』、文化資源社、

二〇二四年。

1 注 この興行にはほかに阪東卯之助、玉村富五郎などの唄方が見える（国立劇場近代歌舞伎年表編集室編『近代歌舞伎年表』大阪篇第六卷、八木書店、一九九一年、六二五頁）。阪東姓の囃子方は戦前戦後にかけての上方歌舞伎ではよく見かける長唄姓で、幕末から明治期の阪東小三郎（唄）、阪東定次郎（三味線）、初代阪東徳三郎（三味線）、大正期以降の二代目阪東徳三郎（唄）などが活躍した。

2 「坂東小三郎」の事典項目（秋葉芳美執筆）参照（『日本人名大事典（新撰大人名辞典）』第五卷、平凡社、一九七九年（覆刻版）、二二〇頁）。

3 例外が【表1-53】の「日本俗謡集」で、表紙見返し、序（一オ）、「元禄猛者順札」（二ウ／八オ）は阪東源次郎の筆跡と考えられる。

4 「同計略花吉野山」は、寛政六年（一七九四）八月十六日より大坂中の芝居で初代鈴木万里（一八一六）が唄つたことでも知られ、渥美清太郎編『邦樂舞踊辞典』（富山房、一九五六年）の「女夫狐」に「また大阪でも、よく義太夫と長唄の掛け合でこの踊をやる」と解説されているように、近世後期以来の上方の伝承が窺われる。

5 「歌舞音曲」第拾號、歌舞音曲会、一九〇八年一月、七〇頁。

6 「爛熟・廃頽期（寛政・慶應）概説」（守隨憲治、秋葉芳美共編『歌舞伎図説』解説篇、一九三一年、一三三頁）。

7 例外が【表1-18】「新曲墨塗女」（明治四十年（一九〇七）初演）で、唄本表紙に龟寿の署名がなく、通例の書式と異なっている。「亥の二月狂言」を手がかりに考証する

と、明治四十四年（一九一二）二月京都明治座で片岡我童らによる上演が該当するのだが、この時、三代目常磐津松尾太夫は咽喉を痛めて一時休演していたらしい（近代歌舞伎年表）京都篇第五卷、四四八～四四九頁）。

8 例えば、大正二年（一九一三）四月十五日～五月五日芦辺俱楽部で九女八の弁慶、琴女の富樫、九女八養女の市川菊子の義経による「勧進帳」が上演されており、長唄は東京から三代目松永和楓を呼んでいる（『近代歌舞伎年表』大阪篇第五卷、五三一頁）。

9 【表1-22】「みちとせ道行 忍逢春雪解」も第二芦辺俱楽部で上演された唄本である。あるいは女芝居であつたかもしれない。

10 秋葉芳美「続・山村流雜話」（流祖を中心とした山村流略系譜）（『上方』第一三七号、上方郷土研究会、一九四二年五月、三一頁）参照。

11 枝屋栄左衛門『歌舞伎音楽集成』上方編（歌舞伎音楽集成）刊行会、一九八〇年。

12 『義臣伝説切講釈』（渥美清太郎編『日本戯曲全集』第十五卷、春陽堂、一九二八年、五〇八～五二五頁）。

13 枝屋栄左衛門『歌舞伎音楽集成』江戸編、『歌舞伎音楽集成』刊行会、一九七六年。

14 ここでは替歌もそれぞれ一曲と数えており、また重複も散見される。厳密な曲数の検

27 配川美加「芦屋道満大内鑑」子別れの場の独吟曲（『演劇研究センター紀要V 早稻田大学21世紀COEプログラム演劇の総合的研究と演劇学の確立』）第五卷、二〇〇五年一月）。

28 異糸子の事績については、以下を参照。山本喜市郎『女優総まくり』、光洋社書店、大正五年（一九一六）。異慶子『女お仕打ち一代記—神戸のお家はん異テル』、沖積舎、二〇〇七年。

29 「近代歌舞伎年表」大阪篇第四卷、一八一～一八二頁。

30 「近代歌舞伎年表」京都篇第五卷、一〇一～一〇三頁。

注18 参照。

31 本史料についてには以下の拙稿参照、「国立劇場蔵小川弥三郎旧蔵史料について—近代人形淨瑠璃囃子方の附帳—」（『研究紀要』第五十七集、二〇二三年三月、三一五～三四四集、二〇二四年三月、三七四～三八四（二～十二）頁）。

32 「国立劇場蔵小川弥三郎旧蔵史料翻刻（抄）」（『研究紀要』第五十八集、二〇二四年三月、三七四～三八四（二～十二）頁）。

33 一例を挙げると、歌い分けを示すと考えられる「ゾ」「ト」「タ」「マ」などの唄本の書き込みが、誰を指しているのか等も不明である。

【表1】阪東亀寿旧蔵史料リスト（全体）

仮番号	表紙	奥付、裏表紙	形態（※…紙継り紐の輪あり）	寸法（タテ×ヨコ、cm）	丁数	本文への主な書き込み	上演年月日座（原本）	『近代歌舞伎年表』（上演年月日、座、主な役者）	典拠（『近代歌舞伎年表』）	備考
1	明治三十六年三月吉日 妹背山道行 寿 阪東亀寿	千秋万歳 樂	半紙本、四穴 紙継り綴、※	24.5 × 16.8	7	「歌」「小」「キ」 「二人」「皆」 「△」「○」、「立 入」、口三味線	明治 36/03	明治 36/03/08 ~ (大阪) 角座 (切狂言) 妹背山婦女庭訓 つゞき三満衆 中の巻 三輪の里道行の場 市川右之助 中村政次郎 市川 米十郎	大阪篇 第4巻	【表2】「所作日カ恵」 に「妹背道行」
2	大切 吉野山所作事 市川右團治 市川右之助 市川市 藏 明治三十六年四月廿八日初日 道 順頃浪花座二於テ 寿 阪東亀寿 長唄 阪東小三郎 全 阪東亀寿 全 阪東仁三郎 三味線 長谷川 徳治郎 全 阪東駒三郎 全 熊 村米三郎 鳴もの 笛 小川源治 阪東直治郎 小川新二郎	千秋万歳 樂大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴、※	24.6 × 17.0	7	「小」「キ」 「上」、「赤鉛筆 書き」、口三味 線	明治 36/04 道順頃 浪花座	明治 36/04/29 ~ 05/28 (大阪) 浪花座 (切狂言) 同計略花吉野山 吉 野山正行閑居の場 市川右團治 市川右之助 市川 市藏	大阪篇 第4巻	【仮番号57】 「所作日カ恵」に「吉 野山」
3	当ル明治三十七年十二月顔見世狂 言 京都南座 中むら脣治郎一座 積恋雪闇の屋 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴、※	25.0 × 17.0	12	「キ」「皆」 「上」、「カン」、 口三味線、ツ ボ、「ヲトシ」、 「どろ～」	明治 37/12 京都南 座	明治 37/12/02 ~ 16 (京都) 南座 (切狂言) 積恋雪闇所作事 嵐吉三郎 中村脣次郎 中村玉 七 竹本連中 長唄はやし連中	京都篇 第4巻	
4	当ル明治三十八年二月一日初日 神戸大黒座 隅田川続俳所作事 市川右團治 寿 長唄 阪東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴	24.0 × 16.2	10 (+ 1)	「上」	明治 38/02/01 神戸大黒 座	—	—	【仮番号57】 「所作日カ恵」に「隅 田川」(市川 右團次 所作)
5	当ル明治三十八年二月 神戸大黒 座 吉野山所作事 寿 長唄 阪東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴、※	24.2 × 16.8	7	「上」「ナシ」 「ツレ」、「琴 歌」、「がく」、 「からす」、「す り金」、「キチ ヨ」、口三味線	明治 38/02 神戸大 黒座	—	—	
6	当ル明治三十八年三月 大黒座 梅曆ふんごぶし所作事 寿 長唄 阪東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴、※	24.2 × 16.7	7	「此よりな し」、口三味線	明治 38/03 大黒座	—	—	
7	当ル明治三十八年三月 大黒座 操り三番叟引抜三人奴さいの踊り 寿 長唄 阪東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴	24.2 × 16.5	10	「皆」、口三味 線	明治 38/03 大黒座	—	—	【仮番号57】 「所作日カ 恵」「操三番 叟」「三 人奴」(市川右 團次所作)
8	当ル明治三十八年五月 西京歌舞 伎座 忠臣蔵七段返し所作事 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴	23.8 × 16.4	9	「上」、「シラ ベ」、「時太 鼓」、「早舞」、 「風音」、「クル イ大小」、口 三味線	明治 38/05 西京歌 舞伎座	明治 38/05/15 ~ 28 (京都) 歌舞伎座 (切狂言) 所作事忠臣蔵凱歌 七段返し 中村脣次郎 中村政次郎 嵐吉 三郎 中村福助	京都篇 第4巻	【仮番号57】 「所作日カ 恵」に「忠 臣蔵七段返 し」(中村脣 治郎一座)
9	当ル明治三十八年六月一日 西京 歌舞伎座 中むら脣治郎一座 大津画所作事 寿 長唄 阪東亀寿	—	半紙本、四穴 紙継り綴、※	23.9 × 16.4	11	「ツ、ミ哥」、 口三味線	明治 38/06/01 西京歌舞 伎座	明治 38/06/01 ~ 13 (京都) 歌舞伎座 大喜利 大津画所作事 中村脣治郎 嵐吉三郎 中村福 助	京都篇 第4巻	【仮番号57】 「所作日カ 恵」に「大 津画」(中村 脣治郎 所作)
10	当ル明治三十八年七月 所作事元禄盆踊り 寿 長唄 阪東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴、※	25.0 × 17.2	13	「詞あり」「カ ン」「△」、口 三味線	明治 38/07	明治 38/07/01 ~ 18 (京都) 明治座 (大切) 所作事盆踊都風流 高安 月郊氏作 市川右團治 嵐巖笑	京都篇 第4巻、 辻番付 (演博)	
11	当ル明治三十八年十二月顔見世 京都歌舞伎座 門けいせい所作事 市川右團治 中村脣治郎 中村福 助一座 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴、※	24.1 × 16.5	10	「小」「キ」、「ス リ上」、口三味 線、見消	明治 38/12 京都歌 舞伎座	明治 38/11/30 ~ 12/15 (京都) 歌舞伎座 大切所作事三幅對土佐絵遊 市川右團治 中村政治郎 市川 右之助 嵐巖笑 竹本連中 長唄連中	京都篇 第4巻、 辻番付 (演博)	【仮番号57】 「所作日カ 恵」に「門 けいせい」 (市川右團 次所作)
12	明治四拾年六月 磯の松羽衣所作事 嵐三五郎一流 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙継り綴、※	23.7 × 16.4	6	「ウタイ」「淨」 「鳴物つなぐ」 「ガク」「どろ ～」、「カッ コ」、口三味線	明治 40/06	—	—	【仮番号57】 「所作日カ 恵」に「羽 衣」(嵐三五 郎所作)

13	当ル明治四拾一年一月 京都歌舞伎座 油とりうつは猿 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	24.1 × 17.1	12	「キ」「ゾ」「ト」「マ」、「此間小猿ヲたく迄引ハル」、口三味線	明治 41/01 京都歌舞伎座	明治 41/01/01 ~ 22 (京都) 歌舞伎座 切 当歳申一諷 所作事 実川延二郎 嵐巖笑 嵐吉三郎 林幹尾	京都篇 第5巻	【仮番号57】 「所作日カ恵」に「油とりうつは猿」(嵐巖笑・吉三郎林幹尾所作)
14	当ル明治四拾壹年二月 京都歌舞伎座 北條九代高時天狗舞所作事 河内家 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	24.0 × 16.2	7	口三味線	明治 41/02 京都歌舞伎座	明治 41/01/31 ~ 2/22 (京都) 歌舞伎座 史劇妖靈星 高時天狗舞之場 実川延二郎 嵐徳三郎	京都篇 第5巻	【仮番号57】 「所作日カ恵」に「高時天狗舞」(実川延二郎所作)
15	当ル明治四拾壹年十二月顔見世 京都南座 からくりまとふ所作事 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	24.5 × 17.0	12	「上」「△」「皆」、口三味線	明治 41/12 京都南座	明治 41/12/01 ~ 16 (京都) 南座 (切狂言) 滑稽所作事 当り的 中村梅玉 中村福助 市川右之助 市川箱登羅 嵐巖笑 中村鴈治郎 市川右團治	京都篇 第5巻	
16	当ル明治四十二年一月 京都夷谷座 縁むすび所作事 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	24.0 × 16.3	10	「キ」「ト」「△」、「ツ、ミ哥」、「ウタイ」、口三味線、見消	明治 42/01 京都夷谷座	明治 42/01/01 ~ 22 (京都) 夷谷座 所作事 初春出雲賑 中村福之助 浅尾闘十郎	京都篇 第5巻	
17	当ル明治四拾弐年十二月 京都夷谷座 忠臣蔵八段目道行所作事 廉文章 吉田屋之場 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	25.0 × 17.2	9	「キ」「上」「どく」、「カン」「チラシ」、口三味線	明治 42/12 京都夷谷座	明治 42/11/28 ~ 12/20 (京都) 夷谷座 第一番目 仮名手本忠臣蔵 四十七訓 大喜利 廉文章 吉田屋の場 中村福之助 嵐和三郎 片岡愛之助	京都篇 第5巻	
18	当ル亥の二月狂言 新曲墨塗女 中満来 常磐津	千秋万歳 大々叶 於明治座	半紙本、二穴 紙縫り綴	25.0 × 17.4	10	「カン」「上下」、「太郎」「花の」、口三味線	—	明治 44/02/1 ~ 22 (京都) 明治座 中幕 新曲墨塗 片岡我童 嵐徳三郎 実川延三郎 常磐津松尾太夫 常磐津千歳太夫 常磐津相生太夫 三味線 岸沢伸助 上調子 岸沢寿左久	京都篇 第6巻	東京風。他筆力。本人の署名なし。 松尾太夫、咽喉を痛めて一時休演。
19	当ル明治四十四年四月 歌舞伎座 忠臣蔵 嵐橋三郎 嵐巖笑 尾上多見之助一座 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	24.9 × 17.3	6	「哥」「ウタイ」	明治 44/04 歌舞伎座	明治 44/04/02 ~ 25 (京都) 歌舞伎座 (前狂言) 仮名手本忠臣蔵 大序より九段目迄 嵐橋三郎 嵐巖笑 尾上多見之助	京都篇 第5巻	黒御簾の下座唄
20	当ル大正二年一月 浪花座 大黒天引抜宝恵駕所作事 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴	24.1 × 16.6	6	口三味線、見消	大正 02/01 浪花座	大正 02/01/01 ~ 23 (大阪) 浪花座 (大喜利) 福の神所作事 一幕 市川斎入 嵐巖笑 中村福助 (長唄) 阪東辰之助 浜村藤次郎 (三味線) 長谷川徳翁 中村小浅 阪東駒三郎 (笛) 阪東福三郎 小川芳松 (太鼓) 小川政次郎 (小鼓) 阪東岩次郎 (大鼓) 阪東久次郎	大阪篇 第5巻	
21	当ル大正二年六月下旬 九条第式芦辺俱楽部 鶴龟引抜紀尾井獅々寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	24.1 × 16.5	12	「タ」「キ」「ト」「×」	大正 02/06 下旬 九条第 芦辺俱 樂部	大正 02/06/21 ~ (大阪) 第式芦辺俱楽部 (邦舞) 鶴龟引抜勢獅々 岩井琴女一座	大阪篇 第5巻	
22	当ル大正式年八月中旬 九条第式芦辺俱楽部 みちとせ道行 忍逢春雪解 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	23.9 × 16.3	6	口三味線、ツボ	大正 02/08 中旬 九条第 芦辺俱 樂部	—	—	
23	当ル大正九年五月下旬 歌舞伎座 大藏猿舞 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	24.2 × 16.7	6	「キ」「ト」、口三味線、見消	大正 09/05 下旬 歌舞伎 座	大正 09/05/20 ~ (大阪) 九条歌舞伎座 (一番目) 鬼一法眼三略巻 菊畑より大藏卿物語まで 片岡長太夫 尾上多見丸	大阪篇 第6巻	
24	大正九年十二月下旬 八千代座 夕ぎり所作 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴、※	24.5 × 16.7	6	口三味線	大正 09/12 下旬 八千代 座	大正 09/12/20 ~ (大阪) 松島八千代座 (切狂言) 雪月花 下の巻 廉文章 吉田屋の場 片岡門童 実川延丈 市川右田作 中村香太郎	大阪篇 第6巻	

25	当ル明治□年七月 戻り橋所作事 寿 長唄 坂東亀寿	千秋万歳 大々叶	半紙本、四穴 紙縫り綴	24.8 × 17.2	9	「大薩摩」「ウ」 「キ」「ヨ」 「△」「上」、「カ」、「ツ」、「ミ」 「哥」、「口三味 線」	—	—	—	【仮番号57】 「所作日カ 恵」に「戻 り橋」(巽糸 子所作)
26	お染久松 七変化所作事 阪東亀寿	—	半紙本	24.0 × 16.5	13	「立入」「上る り」	—	—	—	【仮番号57】 「所作日カ 恵」に「お 染久松 七 役」あり
27	喜せん	千秋万歳 樂大々大 入叶	半紙本、二穴 紙縫り綴	24.2 × 16.7	13	「つゝみ哥」 「カ」、「キ」 「ト」「フ」、「朱」	—	—	—	
28	文学上人瀧の場 不動大薩摩 坂東亀寿	—	半紙本	23.7 × 16.2	3	朱	—	—	—	
29	もみじがり	—	半紙本	25.0 × 17.3	6	「ウタイ」	—	—	—	【仮番号57】 「所作日カ 恵」にも「紅 葉狩」あり
30	越後じゝ 阪亀	—	半紙本	24.1 × 16.4	5		—			
31	老まつ	—	半紙本	24.2 × 16.6	6		—			
32	お光狂乱 神おろし	—	半紙本	24.4 × 16.7	7		—			
33	鰐壳	—	半紙本	24.8 × 17.0	4		—			
34	かづき面	—	半紙本	25.0 × 16.8	4		—			
35	勧進帳 阪東亀寿	—	半紙本	24.0 × 16.6	12	(三味線の手) 「合方」	—			
36	子持山姥 阪東亀寿	—	半紙本	24.5 × 16.8	5 (+ 2)		—			【仮番号57】 「所作日カ 恵」にも「子 持山姥」あり
37	猩々	坂東亀寿	半紙本	24.0 × 16.4	3		—			
38	末広がり	—	半紙本	23.9 × 16.4	5		—			
39	千本道行 坂東亀寿	—	半紙本	24.2 × 16.5	12	「五十式」～ 「六十一」	—			
40	玉うさぎ	—	半紙本	24.9 × 17.0	6	「△」、「朱」	—			
41	積恋雪閑屏 上下	阪東亀寿	半紙本	24.8 × 17.6	23	「上」「哥」	—			
42	供やつこ 坂亀	—	半紙本	24.8 × 17.0	5		—			【仮番号57】 「所作日カ 恵」に「友 奴」あり
43	手縫物語りの段	—	半紙本	23.1 × 16.6	9		—			
44	福山	—	半紙本	24.9 × 16.9	6		—			
45	ましら猿 阪亀	—	半紙本	24.2 × 16.7	6		—			
46	娘道成寺 阪亀	—	半紙本	24.1 × 16.4	9		—			
47	桃太郎	—	半紙本	24.3 × 16.5	4		—			
48	山姥 阪東亀寿	—	半紙本	24.1 × 16.4	5		—			
49	勇神樂 一丁 清元権八 五丁 雨乞小町 九丁 町娘 十五丁 娘小町 十二丁 仕丁 十七丁	阪東亀寿	半紙本	25.0 × 17.2	19	「入事」	—			
50	五斗 八重桐 仕丁	坂東亀寿	半紙本	24.3 × 16.4	22	「△」「詞」	—			
51	乗合万歳 花かむろ 阪東亀寿	—	半紙本	25.2 × 16.7	12		—			
52	吉原雀 馬方三吉 宇治川 名取 草 阪東亀寿	—	半紙本	24.6 × 17.1	19	「△」「ツゞミ 哥」、「朱」	—			

53	日本俗謡集（明治参拾有三年庚子 第三月吉祥） (元禄猛者順礼 常盤御前 石動 丸 将門 戻駕)	本主 阪東亀寿	厚紙表紙、半 紙本、四穴糸 綴	24.1 × 16.3	38	「壹」～「七」、 「二十」～「廿 一」、「四十七」 ～「五十一」、「 廿二」～「廿 九」、「三十式」 ～「四十三」	明治 33/03	「明治参拾 有三年庚子 第三月吉 祥」(表紙見 返し、他筆) 「から哥や やまと言の 葉こきませ て 三すし の緒よりし らへしか な 阪東源 次郎輝正」 (一丁オ、他 筆)。 目次有。
54	明治三拾一年十一月吉日 うつは猿 亀寿 北新地 山村つね様	—	半紙本	25.1 × 17.1	7 (+ 1)	「△」「○」	明治 31/11 北新地	
55	中村流 一人り忠信 坂東亀寿	—	半紙本	24.4 × 16.3	15	「八」～「十五」	—	
56	雑用哥集日カ恵 劇場用	坂東亀寿	厚紙表紙、原 稿用紙（二 折）に罫線有	11.0 × 17.3	200 (白丁 29)			目次有。詳 細【表2】
57	所作日賀恵	坂東亀寿	厚紙表紙、帳 面に罫線有	9.0 × 17.9	154 (白丁 1)			目次有。詳 細【表3】參 照
58	地哥端哥日カ恵	坂東亀寿	厚紙表紙、帳 面に罫線有	9.0 × 18.0	118 (白丁 13)			目次有。詳 細【表4】
59	糸のしらべ	阪東亀寿	厚紙表紙	12.0 × 16.5	98			目次有。詳 細【表5】
60	吾妻しらべ	阪東亀寿	厚紙表紙	8.8 × 17.5	180 (白丁 1)			目次有。詳 細【表6】
61	舞地調	阪東亀寿	厚紙表紙	11.7 × 16.8	100 (白丁 2、紙 片2)			目次有。詳 細【表7】

【表2】「雜用哥集田力惠」内題おもび歌一覧（七二一七曲）[田次省監]

〔かん哥（甲唄）	タ々哥（只唄）〕	
一 松は千年に	○ 424	一 桜ちる *
一 千代はたのしや		一 青柳の
一 花のらんじやに	○ 424	一 梅か枝に
一 立る錦木		一 久市の
一 滝はしじんと	* ○ 424	一 立田川
一 谷の鶯		
一 しがのさゝ浪		
一 磯の松風		
一 風にまかせて		
一 須磨せきもり		
一 渡りくらべて		
一 月は清水に		
一 裏（よい）の妻戸に		
一 しづがふせやに		
一 つゆの玉の尾		
一 雪の戸山の		
一 あしとよしとは		
一 みちはいへつじ		
一 袖のしがらみ		
一 露の玉の尾		
一 あまのたくなる		
一 思ふ心は		
一 ふじは紫 ○ 424		
〔くら上〕		
一 ほゞは雲井に	* ○ 637	一 里はかやぶき *○ 339
一 ありとこことに		一 いでの山吹 *○ 339
一 雪の妻戸に		一 秋の間垣に *○ 13
一 一人り明石の		一 あいは瀬にすむ *江○ 52
一 宇治の橋寺		一 麦つんで小麦つんで *○ 676
一 めしもしらじな		
琴哥		
一 常磐なる		一 坂こへて
一 春風に	花おいといし	一 茶がら木の枝に *○ 445
一 琴の音に	* ○ 298	一 かまた木の枝に
一 玉だれの内	○ 437	一 山で小柴お *○ 719
		一 こぼれ松葉 *○ 300
		一 つるくと *○ 470
		一 今年しや世がよて *○ 295
		一 あれお見や
		一 千草色々 *
		一 宇治は茶所、茶はゑんぶいぬ
		一 しほらしや *
		一 ゆかしきや
		一 かわゆらし
		一 竹にすおくむ *江○ 426
		一 野梅山梅咲染し
		一 すいつけ田葉
		一 年なじさまは *○ 479
		一 しよが袖の
		一 わしが主さん
		一 春の鶯ナア
		一 雨にうたれてナア
在郷		
		一 在郷
		一 早やこい
		一 里はかやぶき *○ 339
		一 七段よめおやの在郷
		一 春はひとしお
		一 佐渡と越後は *○ 336
		一 七里遊ふて
		一 田葉鶴
		一 須磨の浦まで *○ 389
		一 宇治は茶処
		一 吃又ざい
		一 うきよわたりの
		一 在郷
		一 今年しや世がよて *○ 295
		一 御崎おどりは *○ 661
		一 八幡山崎 *○ 730
茶屋場哥		
		一 わしは此町の
		一 ばたんしやくやく
		一 かしにきたとて
		一 阿波の鳴戸から
		一 花に遊ば、 *○ 653
		一 三筋町の
		一 土手の丁ちん *江○ 481
		一 しゃんしよめが
		一 よいの白やき *○ 747
		一 ツツ桜に

ちらし	元より薬の酒なれば	○ 697
一	今迄こゝに	いなりまいりの
一	後日に一トたび	壱分小判に
一	鶴の羽重	今の芸には
一	春海はとふ	いやととびのくのふヲ
一	君が代のく	* ○ 89
神楽大拍子	一 山河草木	○ 349
十二銅から	四社にあり升	* 江 ○ 358
神楽ばやしや住吉の	神楽ばやしや住吉の	* ○ 202
ぎおんばやしや二けん茶や	神楽ばやしや生玉の	* ○ 201
隅田川	十ヲの年から	* ○ 296
向ふ島には	今年しや世がよふて	* ○ 296
待乳山から	柳橋には	○ 88
五町には	花に遊ぶや	いさゝらば *
島田金谷は	島田金谷は	○ 64
行もかるも	行もかるも	いこかもどろか
蛙なくさへ	蛙なくさへ	ろの部
いなり祭りの	いなり祭りの	花ヲ見よ
いの部	一 池水	* ○ 63
かへ哥	一 陽にきつれて	はの部
なびかんせ	一 花見時	初恋の人目はづかし
いつしかの	一 花の咲り	花見時そらはれ渡る
一陽に春やきにけり	一 花は平野に	*
いつもあおく	一 春は花見	かへ哥
いぢ、らば	一 春風に	春風になびく柳のそよぐと
色どる木々の	一 花は平野に	* ○ 568
色の岡崎きや	一 春かあなたへ	かへ哥
色が黒とて	一 春かあなたへ	かへ哥
色が白とて	一 雪はまもなく真白く	かへ哥
(かへ哥はいの部の前にあり)	此替哥はなの部の二ツ目にあり	かへ哥
色の岡崎きや	花の都は扱て哥処	花の都は扱て哥処
花のとんきよ島	□しき月に	○ 566
花のとんきよ島	はでなはつびの三つ鶴や	花が咲ても
花が咲く小金の花が	花が咲く小金の花が	博多女郎衆はナア
花の弥生は	花の弥生は	葉桜やいきなおかたの
羽根をやすむるナア	羽根をやすむるナア	花やかにうちつれきたる
春の永日に	春の永日に	ほの部
宝来にきかばや	日本目出度き	日本目出度き
本田通りすりや	西と東へたてわけられて	*
本田くく(本田さん	にぎわしきくや此花	323
つれてみやがれナア		



## よの部

宵の白鷺やみよのからす \*○747  
 宵のくぜつお車にのせて  
 よそでとかんす  
 よるべ定ぬ浮き草じやとて  
 よるとさわると  
 よいはさわきでまぎれでいても  
 世の中は古いたとへのあすか川  
 よそで咲とはあたにくらしい  
 よにもとゞらくいかづちの

## たの部

玉だれの内やゆかしき \*○437  
 たまさかあへば夢やみづ  
 だましやんせ又だまされし  
 竹になりたや／＼七九竹 \*○江○427  
 竹に雀は中よいけれど

## 松竹梅

たち渡るかすみをやらのしるぐにじ

## その部

その手で深みへ ○407  
 それとめだゝぬなりふりも \*江○688  
 そなたおもへば七里が灘を \*江○451  
 空に一とこゑアレ時鳥 ○412

## れの部

雁とつばめ \*江○210

## その部

うつろふ秋の色見へて  
 うつし心の花の春 ○115  
 うたる、わたしやいとはねど  
 馬が戻つたか与作さんが見へぬ  
 富士のしら雪朝日でとける  
 何をくよ／＼川端やなぎ \*○511  
 梅が咲くかさくらはまだなきか \*江○128  
 あられ玉ちる時雨はまだなきか  
 うすい峠のごんげんさんは ○109

## つの部

月待とそのやくそくの ○461  
 月にうつりしおり口を  
 月はまんまる \*○460  
 うちの首尾して \*○460-1  
 月はさゆれど心はやくぬ ○459  
 月はやへても心はやくぬ  
 つく／＼と物にまされぬ  
 ついてくりやるな八まんかねを \*○451  
 つくばねの姿すゞしきなつじろも

## ねの部

[空欄]

名とりの里にひく三味の

## 花の部はの替歌

浪花名所 \*○510  
 夏の夕ぐれに ○503  
 夏は卯の花山時鳥  
 なれし吾妻の花なれや \*

## 長い／＼両国ばしや

何をくよ／＼ \*○511  
 名古や名物みやしげ大根 ○500  
 なつかしや見先に  
 切れ与三と見染

## かへ哥

見渡せば沖のけしきも  
 夏は卯の花水に浮き草 \*○504  
 浪花新町都で島ばら

## らの部

[空欄]

むの部  
 向ふ通りやる熊のどふ者の  
 紫のゆかりの色やかきつばた  
 山で切る木はたくさん  
 ヤア秋のも中の  
 山で色すりや木の根が  
 閨の夜に吉原ばかりが \*江○724  
 春霞み立るやいづく \*江○724  
 つもる夜はかさなる風え  
 山は／＼山お、けれど \*○721  
 山寺のかねつくしもくが  
 山形の庄やの嫁なぜに  
 八重咲や一ト重心の \*○704  
 山の神じやの  
 やばな事ばし  
 やみ雲にめぐるつゞみの  
 弥生花月さいたりな  
 たおるかたげて  
 ヤア面白の賑ひて  
 柳桜や春／＼と \*○709  
 やよおりらし

## の部

[空欄]

## まの部

松といふもじは ○648  
 松の太夫のうちかけは \*江○652  
 まねく小花についまよい  
 間垣のすがゞき  
 松のかげには  
 月がないたか \*○453  
 まきへかゞやくぶんぬべの  
 まちなはれ／＼

## くの部

くよ／＼と水の流れと \*○262  
 ぐちもいゆらは  
 口で事つけあてにはならぬ  
 くろふするのを ○2060

## やの部

やアしめろやれ \*○700

やもしげる豊芦原の

山すぎて橋を恋じに

やよいの花見は上野か

ヤアヤンレひけ／＼

山で切る木はたくさん

山で色すりや木の根が

閨の夜に吉原ばかりが \*江○724

春霞み立るやいづく \*江○724

つもる夜はかさなる風え

山は／＼山お、けれど \*○721

山寺のかねつくしもくが

山形の庄やの嫁なぜに

八重咲や一ト重心の \*○704

山の神じやの

やばな事ばし

やみ雲にめぐるつゞみの

弥生花月さいたりな

たおるかたげて

ヤア面白の賑ひて

柳桜や春／＼と \*○709

やよおりらし

## おの部

[空欄]

の部

のふ／＼山が見へ候

のめばかんろと皆人が

おの部

[空欄]

## けの部

こじんじ長崎からかわつた物を ○ 305

心づてのナア ○ 284

子供たらしの ○ 268

金比羅舟々 ○ 307

心すぐなる ○ 282

今年しゃなんだか

## ふの部

かへ哥

やく渡る月になやけの

咲そらふ

咲そらふ仇なさくらや

里に名も高尾の紅葉

酒はけんびし

扱てもにぎわし

三尺さつて

えの部

エ、エ、浅草で

遠州浜松 \* 上江○ 139

エ、エ、よい道すじをまつ

エ、エ、新町橋を

ゑんまやん

## ての部

手挑に土手を

あの部

明け渡る

秋の宮島 \* ○ 14

秋の七草 \* 江○ 11

ありやといせい

秋の茂中や

秋の野に

あだな色ある \* ○ 29

仇な色すりや

あわぬ夜は

あごでしらせで

あら玉の

あやめ咲とは

秋になりや

油( )と浪花町中売りあるく \* ○ 41

天津風( )

あゝとよしとはナア

天の川ほしのちぎりも \* ○ 45

姉さんほんじよかへ

姉は狐で妹は小猫

赤い物にとりては \* ○ 8

あけわたる雪のけしがみ

雪はふる( ) \* 江○ 740

かの部

ゑくゞぐる月にやゑ( )や

一 実に豊かなる日の日本の  
一 げん正みたさに \* ○ 268

一 げいこ朝もどりお  
一 けんけらけん( )

一 舶じやあぶない  
一 ふけてぬる夜のねやの戸に \* 江○ 612

一 筆もおよばぬゑの島景色  
一 ふちとなるその源は \* ○ 621

一 ふさぎやはだから  
一 ふけてこがれてしまつ夜のつぶや

一 ふつと見染しア、おみなへし  
一 ふけて二人りが打とけて

一 富士の山から三保の松ばら  
一 舟は出てゆくほ上けて \* 江○ 625

一 伏見京の町  
一 文月の星のあふ夜を \* ○ 627

一 ソよとすゞしあ夕ぐれに \* ○ 627

一 こちのおもはく \* 江○ 294

一 九重の都の空を立いで、

一 恋してふ花のまに( ) \* ○ 271

一 月と雪朝日色どる  
一 関田川水に加茂さん

一 恋の山口名も高め  
一 こちの町の夜番じんは

一 恋にあらわれ  
一 夏の月かげ  
一 心嬉しき

一 雪の妻戸に  
一 心関やに蝶が笑ふ  
一 恋の千葉文ナア \* ○ 14-1, 278

## ゆの部

桐が間垣 \* ○ 256

君お待つ夜は ○ 248

あり( )すそなたの足は

君とねよふか \* 江○ 236

きせる片手に

けふはあすかと

菊のしほりの

気にいらぬ風とあろふに

ぎおんにつゞいて

京から下る御正指様

岸の柳についまねかれて

君に扇のナア ○ 238

松竹梅

きみかよのにじらやたくね

夢はふわふの ○ 744

雪の戸山に

雪となる

夕べ横町で

雪見酒今朝もし( )ぱり

雪はまもなく

雪はしん( )

雪はふる( ) \* 江○ 740

行もかかるも

- 一 雪見酒とて  
めの部  
此花  
一 □しき顔まだつゝむ  
みの部  
水に一と筆かきつばた  
水の出花と二人りが中は  
見渡せばあかねさす  
道に四筋の鉄道すらりと  
見やしやんせ今宵の月と  
御代は文明一樣に  
見たやあいたや山ほとゝわす \* ○ 665  
見たやあいたやあの君様へ  
やぶにそだちしあの鶯も  
いつもあお／＼松の木さへも  
□かゑりに六道の辻で  
三島沼津やはらふじも ○ 662  
しの部  
繻子のはかまの（此かへ哥せの部にあり）  
下にはむくの日あくらや \* ○ 362  
しとふ心はナア \* 江 ○ 361  
恨み顔にて \* 江 ○ 361  
忍ぶもじづり ○ 369  
白いはだへ  
東雲の別れにしつかと  
新実いやではなけれども  
島田金谷はなんじやいな  
島田金谷はナア  
四国へんろの若後家さんは  
信州エ信野の善光寺様エ  
しやか様が目なし鳥に  
じやんじやかくく ○ 374  
しらめしづりお  
地廻にかたの手拭  
忍ぶなん身は  
時雨□浅路が原の  
しめつからみつア、  
忍ぶならやみの夜は ○ 367
- 一 白浪のこゝによするや ○ 384  
しぐれして待夜は  
四季の□会の事初め  
しのぶ逢夜の  
白たへの富士の高根じ ○ 385  
おたやんおさかさだいて  
天狗さんをさかさたいて  
しげきあふては  
ゑの部〔空欄〕  
ひの部  
ひるかへす  
引三味せんはきおん町  
ひらけ重し御代げしき  
東山のナア／＼お月あや \* ○ 589  
東山のナア／＼上から見れば  
一とつとサア  
一とつとサア  
二つとサア  
三つとサア  
四つとサア  
五つとサア  
六つとサア  
七つとサア  
八つとサア  
九つとサア  
十をとサア  
一とせの松も今年の  
もの部〔空欄〕  
瀬田の橋石山まいり  
千里あるよな  
一 千両とる共ナア ○ 7022  
一 せかれ／＼くよ／＼くよ  
一 こかれ／＼ふわ／＼じ／＼ふわ  
追分  
一 沖のまに／＼  
一 かさお手に持ち \* 江 ○ 207  
一 おいでぐりやるナ  
一 西で追分東で関所 ○ 519  
一 義理と人情は命のかなめ  
一 むねの雲きり  
野歌  
一 秋が来るかや鹿さへなくに \* ○ 9  
一 さいてしほれて  
一 きそで掛橋太田の渡し  
一 せけん広ふに  
すの部  
一 すいかぶすいか \* 江 ○ 386  
すいかぶすいか  
住吉のすましもちで  
ずほんばへ \* ○ 464  
おきの浪間おともよぢかわす  
まちなはれ／＼  
一 上り新内  
一 今朝もろふかで  
花も風にちらさる、  
さりし女房のかたみとて  
わるどめせづとも  
孝と愛との荒浪に  
坂に車おおさづとも  
一 三日うらんで  
一 わかれの風だよ  
そり  
一 八つ山下の茶屋女 ○ 703  
一 むねの雲きり  
雪おり笹や \* ○ 737  
清盛さんは  
一 花はぢりても月日をまたば  
追分  
一 沖のまに／＼  
一 かさお手に持ち \* 江 ○ 207  
一 おいでぐりやるナ  
一 西で追分東で関所 ○ 519  
一 義理と人情は命のかなめ  
一 むねの雲きり  
乳もらい歌  
一 そもそも／＼是は宇多の天皇  
一 引に引ぬか

一 竹に品よく  
一 見附られたる  
ややあて

一 花の雨ぬれにくるわの ○ 5027

一 われじむ此人は ○ 4036  
一 ちめりしめじよこかみこじ  
植木やどく

一 あだなこの世に ○ 2009

一 わらすや  
同かへ哥  
雲にかけはし  
花に蝶々  
越後の国  
ちよろけん

一 あきくれて ○ 2004

一 つ、いいすじの ○ 2004

一 乳もらい哥

一 そもく是は宇多の天皇

七福神  
舟のり  
露とすゝき  
秋くさ  
まめだ  
おきてみつ  
月の八日  
豆腐御用  
住吉踊り  
おちやべ  
あいたさに  
一陽に \* ○ 78  
梅のつぼみ  
いけん曾我紋尽し  
善玉悪玉三社まつり

一 花の雨ぬれにくるわの ○ 5027

一 白茶袴の

一 風に柳の

一 元は浮氣で

一 かほにはそりか

一 大倉於京舞

一 雲の上なき

シギン

一 けんけんい

一 へいきすいたに

一 国をやつて

一 丈夫三十

一 □をめいで

一 天下のたいけん

一 國土まつたくさだまる

一 ころもかんにいたる

一 人ふるれば人をあら

一 ウタイ

一 りうじよがたちもふ

一 竜神さる沢の池の

一 もしもにたけき

一 もながらこゝに

一 とく／＼たてや

一 実にも安樂世界より

一 今お初めの旅衣／＼

一 所は高砂の尾上の松も

一 四海浪しづかにて

一 げにあおぎてや

一 ありがたのよろいぶや

一 シギン

一 ウタイ

一 植木や

一 山寺の春の夕ぐれ ○ 4077

(五十九)

つがいはなれぬ  
御所の御庭 ○ 291  
ひげ奴  
松の二葉  
曾我宇治茶かへ哥  
松になりたや  
仇な世界に \* ○ 31  
鶴の声  
すりばち  
黒かみ ○ 2061  
なの葉 \* ○ 2051  
あさとて  
きゞす ○ 2052  
ゆき \* ○ 2129  
政月  
扇づくし  
越の戸  
ほうらい

ゆかりの月 ○ 2030  
万ざい  
袖じうる ○ 2134  
袖の露 ○ 2079  
滝づくし  
綱手車  
夕かほ  
ゑんのつな ○ 2135  
わん久  
通ふ神 ○ 95  
袖頭巾  
かくれんば  
おぼこきく  
ひなぶり \* 江 ○ 275  
羽織妻  
水の出花  
あしかり  
竹のゑん

おけとり \* ○ 440  
大仏  
やしま  
菊の露 \* ○ 2117  
かなわ \* ○ 2192  
加賀の千代

〈凡例〉（表2）（表3）

・□・〔 〕は難読、不詳。  
・（ ）は目次表記、補記。  
・〔 〕は筆者補記。  
・\*は『歌舞伎音楽集成』（江戸編・上方編）と照合。○  
は『芝居唄』と照合（数字は当該書の唄番号）。但し、い  
ずれも多少の歌詞の異同あり。  
・目次によつて見出しを補記したところがある。

【表3】「地哥端哥日力恵」（一五九曲）〔目次省略〕

天神のどく 忠臣蔵独く お岩どく くずの葉どく あれお見さいナア\* 露の蝶\* きれ尽し あやぎぬ\* どんでん 玉川\* わすれ生姜 ねのび 八重一ト重葵の上 浮船 淀川 山めぐり 山尽し 四つの袖 夕ぞら いもせ川 よるべ 口きり よおうつせみ 常磐の松\* 立花\* 梅の月 こゝは島原\* 花の旅\* 茶おんど 鳥辺山\* 沖の石 夏はほたる 見たいな こよいあふとのわしが思イ 土手 私もの 秋の夜 宇治茶 かへ哥 忍ふ夜 柳ばし 替うた いざや\* 替哥\* 柳々\* 夕くれ 桐の雨 ぐち 一トこゑ しよ(が)いなア\* 齋藤\* 一トつ夜着 桜見よとて 替哥 梅にも春 夕だち 一ヶ夜明れば 福寿草 潬戸のだん畑 三国一 梅と松 替哥 わしが国サ 土手の替哥 春はこづへ四季\* 花のくもり 高砂や 玉川 初春や 潤田のはし かへ哥 いなづま あだな世界\* 三下り夕立 やりさび 西行 書おくる 今朝のわかれ 思ひこんだる 雪とも さみだれ 萩桔梗 あだな笑顔 竹の春 今朝のあめ\* しんとふけて\* しば玉 首尾ト二人 里おはなれし となり座しき 月花 夜やさむし\* つらさうき身\* かへ哥 しくれて 雪はしんく 香水の主しさんと おたがいに かへ哥 ふけてこがれて あさゞは\* ねみだれし それと目だし むらとして 四季狸キ 雪月花 青柳の萩の戸お\* こゝもり しかの唐崎 東京四季 うわきどうし うそと誠と 若ふづま まりは柳と(露は小花と) 有馬名所\* 有馬二階から 夜ばいさんえ 金比羅舟々 むらさき めぐる日や 深川 奴さん願□かへ哥 松の縁 朝顔どく おちやめのと 糸のしらべ 東獅々

【表4】「所作日賀恵」（二十五曲）〔目次省略〕

かけ画所作 (明治三十六年三月角座 市川右團次 中村福助一座) 妹背道行 (明治三十六年三月角座 市川右之助 中村政二郎 一日かわり) ※お染久松七役 (明治三十六年六月浪花座 市川右團次) 桐一葉・末広舞 (明治三十七年五月角座 片岡我当一座) 伏見の里 (明治三十七年七月天満座 中村芝雀所作) 吉野山 (明治三十六年四月浪花座 市川右團次一座 同右之助相勤申候) ※六歌仙 (嵐三五郎所作) 紅葉狩 (中村政治郎所作) 隅田川 (市川右團次所作) 操三番叟・操三番叟前※ 三人奴 (市川右團次所作) ※ 忠臣蔵七段返し (中村鴈治郎一座) ※ 大津画 (中村鴈治郎所作) ※ 四ツ谷怪談夢之場 (市川右團次所作) 夜ばい星かよい舟 (市川右之助所作) 門けいせい (市川右團次所作) ※ 友奴 (片岡我童所作) 羽衣 (嵐三五郎所作) ※ 油とりうつば猿 (嵐巖笑 同吉三郎 林幹尾所作) ※ 高時天狗舞 (実川延二郎所作) ※ 保名狂乱 (花井梅所作) 戻り橋 (巽糸子所作) ※ 子持山姥

【表5】「糸のしらべ」(七十四曲) [目次省略]

(地歌) 玉川 (本てうし) 夏はほたる 見たいな あめうり こゝもり わしがお  
 もい 土手 我もの 秋の夜 宇治茶 しのぶ夜 柳ばし いざや 柳々 夕ぐれ  
 きりの雨 ぐち 一トこゑ しよがいな さい藤 一ト夜着 さくら見よとて 梅  
 にも春 一チ夜あへれば 福寿草 沖の大舟 うらのだんばたけ 三国一 梅ト松  
 まめだ つぼら 月の八日 江戸子もり 咲夕さくらの木に 豆腐御用 わしが国  
 サ 住吉おどり きせん (花本こま) おちやべ わすれ生姜 あいたさに 土手かへ哥  
 曽我 奴凧 明神の けほらちこく 四季 かほちや見よとて 春はこづへ 松  
 の葉 四季 千本道行 一やふに 花のくもり 五段かえし 曽我紋づくし 深川  
 高砂や くわしん壳 雨の夜 宇治茶かへ哥曾我 十日戎かへ哥 力弥 善玉悪玉 養老  
 扇蝶 通り舟しゆびと二人 橋づくし きさらぎ 花が咲タラ 松になりたや 羽織妻  
 ねのび 八重一重 博多沖から

【表6】「吾妻しらべ」(一二二曲) [目次省略]

玉川 さしてとる あれお見さいな おんら 千本忠信花道入 けに花なれば ち  
 らし たい／＼かぐら おちやめのと 大神舞 大津ぶし 与三郎 藤娘 権きせる 夜  
 ふけて 山村政田家煙 品玉や 山村政手踊り 里で咲花 初春や あづさ手踊り せた  
 のはし つゆの蝶 梅と松 堀住吉 花に蝶に 玉川 松づくし しよろ殿 草か  
 り いなづま 新浅妻 あびらくおかげ あびらくてふやれ／＼ きれづくし 本田中村つぐ子  
 もり どんでん 長さよ (ちらしうとう川舞) あたのせかい 三下り夕立 花のくも  
 り 三ヶ月 たつね行ましよ 越後国 やりさび 西行 草かり童子 茶つみ 朝  
 日ノ御旗 合羽奴 松風 あやきぬ ちよろけん さしてとる 大めん (花本)  
 こゝは島ばら 陸平様山村様手踊り 新吉の 引物尽し 勇男 西ノ宮なかな平奴 西ノ宮道  
 成寺前哥 西ノ宮成寺祈り のほり夜舟 五郎ちらし 七福神 本田中村屋草かり まし  
 ら入 やア面白や 江戸土産 三番叟 三作万才 子供遊び 山駒様舟乗 使イ奴 神  
 田奴 書おくる けさのわかれ 思ひこんだる 雪とけ きん時 明ケのからす (梅  
 本) 梅本つゆとすゝき 三番叟 芸者舞 春駒 (中ふく) くらま (中ふく) 新年梅  
 (杵のぶ) さみだれ (杵のぶ) 私が思イ 萩桔梗 花ノ旅 (山村) しんぼく (山村)  
 あだな笑顔 心いき つな上 菅生丞 寅ノ年 茶せん壳 三作万才 新高砂 秋  
 くさ (東やりさび) 渡辺綱 登り夜舟 あいた見たさに 神おろし おきてみつ  
 一ヶふじ 道成寺ウタイ 堀住吉 浮舟 十日戎 殿さん 奴さん 姉さん 四社  
 に有升 ふし娘 国せんや 寿 梅が栄へ 忍ふ恋じ 玉川 弓の月

【表7】「舞地調」(二十七曲) [目次省略]

くるわ五郎 (此間山村てつなし) お七吉三 八郎兵衛 角兵衛獅々 本田中村つぐ様二人  
 玉川 大尽舞 葵の上 若菜摘 柱立万才 (山村) 汐干狩 名所競 そば□ (だる  
 まさば) こよい 同かへ哥 こゝわ島原 矢倉お七 神田祭 信野 山村けそう文  
山村大臣舞 壬生平 (梅元) 小三金五郎 浮船 月夜子守 ふじ娘 きおん中居 千  
 本道行